

## 社会技術開発事業 研究開発プログラム 「科学技術と社会の相互作用」

### 平成19年度採択プロジェクト企画調査 事後評価結果報告書

1. 研究代表者：三宅 美博（東京工業大学大学院総合理工学研究科 准教授）

2. プロジェクト企画調査の題名：福祉機器の開発を介する市民と研究者の共創リテラシーと場づくり

#### 3. プロジェクト企画調査の概要：

科学技術に偏った福祉機器の開発プロセスの問題を取り上げ、そこにおける医師や研究者の担う科学技術の論理と患者や家族の担う社会生活の論理の乖離に注目し、それを克服するための手法を提案する。特に、一方の論理からのリテラシーではなく、患者側と研究者の両方の論理が相互乗り入れできる「場づくり」を介して、社会的な共創を再生するための開かれた機器開発のプラットフォームの構築をめざす。

4. プロジェクト企画調査の実施期間：平成19年10月～平成20年3月

#### 5. 事後評価結果

##### 5-1. プロジェクト企画調査の目標の達成状況

プロジェクト企画調査として予定された活動は概ね実践された結果、当初の目標は概ね達成された。予定された理論的検討、実践的調査等については着実に実施され、その結果興味深い結果も得られている。

##### 5-2. 研究開発プロジェクトの提案にむけた準備状況

研究開発プロジェクトの必要性及び実行可能性については、ある程度確認されたものの、課題も残った。リハビリテーション及び福祉機器開発について、現状の問題点と従来欠落していた視点の把握は行われ、研究開発を行う必要性は明らかにされた。ただし、行われる研究開発が他の方法に比べて優れている、もしくは必要であることが十分に明確になったとは言えない。また、本企画調査に基づく研究開発プロジェクトの提案が、リハビリテーションに関する技術開発に必要な実践的場作りにフォーカスされるのであれば、実行可能性は示されたと思うものの、「共創リテラシー」の場作りの支援技術については未だ不明な点が多い。福祉機器の開発の改善を図る場を設けることにより、よりよい技術開発の方法論を創出する内容としては理解されるが、現状の内容から一般的な気づきの場及びその支援技術の創出まで目指そうという実行可能性には疑問が感じられた。

研究開発プロジェクトの内容及び計画の具体化は、ある程度なされたが、いくつかの課題も残っている。リハビリテーション技術に関する実施内容・計画の具体化は進んだが、リハビリテーションの場面を通じて関係するステークホルダーが互いの論理の違いに気づき、出会いの場を作ってフィードバックを行う支援技術の開発の計画の具体化は明確には示されなかった。福祉機器の開発を超えた社会における場作りを支援する技術の開発については、具体的な計画の検討が必要と思われる。また、客観的に観察可能な指標を設定して、実証する方法論を導入する必要があると思われる。

研究者と社会の問題の関与者が協働する体制は、概ね整備されたと言える。研究開発に必要な関係者が適切に選ばれているが、さらにはクリニック側からだけではなく、患者・家族・地域の側からの主体的な関与がなされるような配慮が必要ではないかと思われる。